

と、3 視線をそらしながら言った。

……ばあちゃん、気づいているんだ……

胸を衝かれた思いだった。この、変な関係を。祖母と孫でありながら、対等な友人同士のような変な関係。対等な友人同士でありながら、世話をするものされるもの、※庇護するものされるもの、という変な関係。

ばあちゃんは、それからまっすぐに私を見つめて言った。

「だから、それはコウちゃんによる。コウちゃんが、どう思っているかに」

ばあちゃんのまっすぐな視線は、真剣のよう^{しんけん}に私に突きつけられた。

「さわちゃんは、うるさくてもいいの？」

ばあちゃんは、黙^{だま}ってこっくりうなずいた。

「じゃあ、私も、こうしてさわちゃんとお話し出来る方がいいな」

正直に言^まって、それはそのとき本心ではなかった。無意識のうちに、周囲のニーズに合わせてしまう、私のいつもの癖が出たのだ。決断を迫^{せま}られる場面ではいつもそうだ。

けれど、それで、ばあちゃんの目はぱつと輝^{かがや}いた。ほうつと、胸をなでおろす音が聞こえた気さえした。

ずっと、後になって、私は、本心、というものが、それを言^いった当初はそう思えなくても、実はだんだんそれに近づいていくこともあるのだと思^{おも}った。むしろ、4 そのときにはわからなかった本心が、ひよこつと顔を出^です、ということがあるのかもしれない。

それを考えると、時間というものは不思議だと思^{おも}う。その時点ではわからずにいた言動が、あとになって全体を振り返ってみると、あらかじめ見事にコーディネートされた一つのテーマに統一されているようにも見えるのだ。

「トイレ、行こうか」

ばあちゃんが、照れくさそうに言^いった。

「おうし」

私はわざと力強い声を上げた。

トイレからの帰り道、ばあちゃんは熱帯魚の前で立ち止まった。

「これ、全部コウちゃんがやったの？ 草とか、石とか置いたの？」

「そうだよ。砂洗^さうの、大変だったんだから」

「へえ。コウちゃんは、じゃあ、神様ね。この水槽の創造主」

「うーん」

ばあちゃんをベッドへ戻すと、私はもう一度熱帯魚の前に座った。

……安定している。

私はしみじみ胸に手を当てた。ここしばらく動悸^{どうき}もしていないし、手のひらに汗^{あせ}のにじむこともない。水草や魚の緩やかな動きを見ているだけで、本当にくつろぐ。

魚たちに定期的に餌^{えさ}をやったり、水槽の管理をすることが、自分以外の生命とのバランスをとっている感じがするのだろう、と私は結論づけた。私は昔から、いろいろなことに結論を与えるのが癖だ。結論を出すまでは、ずっとしつこくそのことばかり考えている。

……自分以外の生命との、バランス……

5 ちらつと、ばあちゃんのことを思^{おも}った。

……あれ。さつきより、ネオンテトラの数が少なくなっているような気がするけど……

気のせいだろう、今日はもうこれぐらいにしよう、と立ち上がり、二階へ昇^{のぼ}った。

(梨木香歩『エンジェル エンジェル エンジェル』より)

【注】※ネオンテトラ……熱帯魚の種類の名前

※覚醒……目が覚めること

※庇護……かばって守ること

問一 1・2 にあてはまる最も適当な語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア あたかも イ なにげなく ウ かろうじて エ あらかじめ

オ 思いもよらず カ えもいわれず キ 仕方なく

問二 線1「ばあちゃんは①②」で②「がない」とあるが、①②には祖母の性格を表す語が入る。

最もふさわしい語の組み合わせを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ①正直 ②根気 イ ①頑固 ②余裕 ウ ①偏屈 ②勇氣
エ ①素直 ②屈託 オ ①短気 ②遠慮

問三 — 線2 「私は、今のばあちゃんを、確かに煩わしいと思っているところもあるけれど、それは消えてしまえばいいというほどではない」とあるが、ここでの「今のばあちゃん」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 寝たきりになり、コウコの補助なしではトイレにさえ行けない祖母。

イ コウコのご機嫌をとろうと、友達のふりをして話を続ける祖母。

ウ 夜中に突然覚醒し、少女のような声でコウコに語りかける祖母。

エ コウコが大切に飼っている熱帯魚に関して、関心を示さない祖母。

オ コウコの行動に対して、あれこれと口うるさく干渉してくる祖母。

問四 — 線3 「視線をそらしながら言った」とあるが、この時の祖母の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 少女に戻ったままコウコと対等な友人のように話をしたいが、コウコに負担をかけてしまうと感じなかなか言い出せずにいる。

イ コウコは、世話ばかりをかけている自分と話をすることをやはり嫌がっているのだと、コウコの投げやりな態度に落胆している。

ウ 少女のころの自分に戻りたいと願い、少女のふりをして話していることを、コウコに知られるのは恥ずかしいと感じている。

エ コウコに世話をしてもらえなくなってしまうば、寝たきりの自分はこのまま死んでしまうのではないかと不安を感じている。

オ モーター音がうるさいから水槽を移動してほしいと頼みたいが、コウコが熱帯魚を大切にしているため言うのをためらっている。

問五 — 線4 「そのときにはわからなかった本心が、ひよこつと顔を出す」とあるが、この場面ではどういうことか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 祖母が本当は何を望んでいるのかこのときには理解できなかったが、ずっと後になって考えると祖母の気持ちがよくわかるということ。

イ 本心ではコウコ自身も祖母と友達のように話することを望んでいたのだということに、祖母のふとした一言で気づかされたということ。

ウ たとえ本当は祖母と話をすることを望んでいなくても、いったん口にしてしまったら、そのように行動に表さなければいけないということ。

エ 本心というものは隠しきれないものであり、祖母と話をしていたいと言いなながらも本当はそれを望んでいないということが表情に出てしまったということ。

オ 本当はこのときコウコ自身も祖母と友達のように話することを望んでおり、その気持ちが自分でも気づかぬうちに言葉となって出てしまったということ。

問六 — 線5 「ちらつと、ばあちゃんのことを思った」とあるが、ここで「私(コウコ)」が祖母のことを思ったのはなぜか。その理由を七十字以内で答えなさい。

問七 「私(コウコ)」の人物像として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。ただし、解答の順序は問わない。

ア 夜中に突然眼を覚まし少女のように自分に語りかける祖母の異常な行動に対して恐怖を覚え、上手に対応してあげることが出来ない気の弱い人物。

イ 熱帯魚を飼うために寝たきりの祖母の世話を引き受けたのはよいものの、思った以上に手のかかる祖母に対してつらく当たる自己中心的な人物。

ウ 夜中だけ突然少女のようになってしまう祖母の不思議な姿を眼にしてもそれを非難することなく、なるべく明るい様子で介護をする心優しい人物。

エ 祖母の真剣な表情に圧倒されて、つい適当にとりつくろった答えをしてしまうなど、ものごとを最後までつきつめて考えることが苦手な人物。

オ 自分の考えとはちがついていても、思わず祖母の望みどおりの答えをしてしまうなど、相手のことを思いやって周囲の状況に合わせしてしまう人物。

カ 寝たきりの祖母の介護を一手に引き受け、そのわがままな言動にも笑顔で対応できるなど、常に情緒が安定している心穏やかな人物。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して本文には省略および表記を一部変えたところがある。

私たちはことば——大人の普通の日常のことば——をどういうふうにとらえているでしょうか。よく「ことばは伝達の手段である」と言います。このとらえ方ですと、私たちはことばを使おうとするとき、まず何か表したい内容がある、しかしこの内容は頭の中で考えていることですから外からは見えない、だから、それを伝えようとするならば、何らかの形でそれを表現——つまり表に現すということ——しなくてはならない、表に現すためにことばを使うのである——普通私たちは、ことばというものをこのように位置づけていると思います。

ところが場合によっては、これが逆になるような場合もあるのではないか——つまり、ことばのほうが先行して、ことばがある内容を生み出すということです。そういう状況は、日常的なことば遣いではあまり普通でないかもしれないけれども、たとえば子どものことばとか、詩のことばではかなり①典型的に起こっているのです。

具体的に実感を持っていたくために、谷川俊太郎氏の「かっぱ」という詩をみてみましょう。

かっぱ かっぱらった

かっぱらった かっぱらった

とってちってた

かっぱ なっぱかった

かっぱ なっぱいっぱかった

かってきってくった

私たちは、この作品に最初に接したとき、どのように感じるでしょうか。多分、まず、どこでことばを切って読めばよいのかちよつととまどいますね。最初にタイトルが「かっぱ」となって出ていますから「かっぱ」ということばが使われているはずということがまず頭に浮かぶでしょう。そして最初の行を読み始めるとまず、「かっぱ」と読めます。それから次にまた「かっぱ」と出てきますから

「A」と読みたくなりますが、そうしますと「らった」というのが残ってしまつて何のことかわからなくなつてしまします。これでは駄目だと思つて元へ戻つて考え直す。今度は「かっぱらった」と読めそうだがということがわかつて、一行目は

B

「と読むのだということがわかります。そして次に二行目へ行きますと、また「かっぱらった」と読めそうだから「か

C

一度考え直して「と読まなくてはいけないということがわかります。そして次にまた「かっぱらった」というのが出てきて、三行目の「とってちってた」というのは、多分このラッパの音だろうというような連想を持つことでしょうか。こうしてこういうものを読んでいるときの印象を分析してみますと、何か私たちが日常その存在をあまり意識していない「ことば」というものがまるで壁か何かのように私たちの前に立ちふさがっているという感じがします。

私たちが日常、ことばを使っているときは、普通表される内容がまずあつて、それを盛つて運ぶ手段としてことばがあるというふうを考えています。私たちの関心はもっぱらこの内容のほうにあるわけで、それを運ぶ②仲介役としてことばが入つていても、ことばそのものにはあまり注意を払いません。ことばというのはあるようでないようなもの、存在しながら、存在していないような、何か透明になつてしまつていくような感じがするのではないのでしょうか。

ところが、「かっぱ」のような詩を読みますと、俄然ことばが、私たちの前に立ちふさがつて、それに私たちが頭をぶつけている——そんな印象を持つのではないかと思います。ことばがそこでは不透明になつて、私たちの意識が素通りすることを許してくれないわけです。日常、あまり意識していないことばそのものの存在ということを、③否応なしに意識させられてしまいます。こういう状況は、詩によく出てきます。1詩のことばは日常のことばと同じではありません。そのため私たちはそこで一度立ち止まつて、考えなくてはならないということが起こってきます。つまりことばが不透明なものになつてしまい、私たちがことばというものを改めて認識することになるのです。

そういう意味でもう一度「かっぱ」の詩に戻つてみましょう。使われている単語はそんなに多くも難しくありません。「かっぱ」が出て、それから「かっぱらった」が出てきます。たとえばこの「かっぱ」と「かっぱらった」ということばは、日常のことばとして考えている場合は、私たちはこの両方がよく似た形をしたことばであるという意識を持つようなことはないでしょう。ところが、こと

ばが不透明になって私たちの前に立ち現れますと、「かっぱ」と「かっぱらった」は、形が非常によく似ているという意識を否認なしに持たされます。そうしますと、ことばについての非常に素朴な感覚として、語形が似ていると語の意味も似ているのではないかというふうな発想が働きはじめます。つまり、「かっぱ」と「かっぱらった」とでは「かっぱ」という所が共通である。そうすると意味のほうでも関係があるのではないか。たとえば「かっぱ」というのはいたずら好きな生物だから、「かっぱらう」という行為も、何かもと「かっぱ」のするようなことをいうのではなかったのか。もちろん語源的にはそういうことはないでしょうけれども、そんな印象をきつと持つでしょう。日常の言葉遣いですと、「かっぱ」と「かっぱらう」は私たちの頭の中の全然違う所にしまい込まれていて、相互に連想するなどということもないでしょう。しかし、二つ並べられてみますと、語形が互いによく似ている、そうすると語の意味も似ているのではないかと考えたくなるわけです。私の場合ですと、かっぱの口の先の方からかっぱの口の先の逆みtainな形をしている——そんな類似点を連想します。あるいはまた、かっぱが鳴くとするとかっぱのような音を出すのではないか——そんなことを思ったりもします。

ところで、これは一つの新しい経験です。このような経験は、日常「かっぱ」とか「らっぱ」とかバラバラに使われていたときには、出てこなかったことです。日常のことばですと、私たちがまず何かを経験して、それをことばで表すということをします。ところが今の場合、ことばが先行して新しい経験を生み出すということが起こっています。そこでは、日常の世界の中では私たちがしなかったような経験、つまり、²ことばが新しい経験を生み出すということが起こっています。ことばが新しい経験とか内容を生み出す創造の力を持つものとして働く、ということになるわけです。このようなことばの働きは、日常生活の段階では、普通あまりないことでしょう。

私たちの日常生活では、ことばのきまりというものが習慣的に決まっています。そして、私たちはいちおうきまりの範囲内でことばを使うことで満足していて、それを超えるというようなことは比較的まれです。(略)二つのことばの違いかた——経験が先行してそれをことばで表すことと、ことばが先行してそれが新しい経験を生み出すこと——これは「伝達」と「³」ということとでとらえることもできますし、あるいはことばの「実用的」な働きと、ことばの「美的」な働きとも言われることもあります。この後者のほうは詩のことばに典型的に見られるということ、ことばの「詩的」な働きという言い方をすることもあります。

私たちのことばについての認識は、ふつうその「実用的」な働きのほうに大変かたよっていて、もう一つの「詩的」な働きのほうは忘れられがちです。それは、この「詩的」な働きがよく現れるのは、詩のことばであるとか、子どものことばとかどちらかといいますと、ことばの「中心」ではない部分だからでしょう。そういうことばの「詩的」な働きというものが日常のことばにおいてよりも重要な役割を果たすという意味で、子どものことばと詩のことばとは似ているということができます。どうしてそうなるのでしょうか。大人の場合ですと日常的な生活に関する限りは、経験の範囲と、ことばでもって表せる範囲がだいたい一致していると考えてよいでしょう。ところが子どもの場合は、その経験の範囲を表せるだけのことばの能力がまだ十分発達していない。その一方では子どもにとって毎日新しい経験の連続です。自分がすでに身につけていることばだけではとても新しい経験を十分に表現することができない。そうしますと、どうしてもことばの枠を破るということが起こるでしょう。⁴子どものことばは、常に何かきまつた範囲内だけにどまつているのではなくて、その枠を破って広がっていくという傾向を示すわけです。

これはちようど詩人の場合と同じことになるのではないのでしょうか。

普通の人、日常的な経験を日常的なことばで表現して満足しているのに対して、「詩人」と呼ばれるような人たちは、日常的な経験を超える経験をもつでしょう。そして、それを表そうとすると、もはや日常のことばの使い方では不十分なはず。そこで、どうしても、日常のことばの枠を超えたいということが必要になってくるでしょう。このように考えますと、⁵詩人の場合と子どもの場合はある意味で非常によく似た状況にあるということになります。

(池上嘉彦『ふしぎなことば ことばのふしぎ』より)

問一——線①③の本文中の意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア いつも必ずそうなるように
- イ 何度も何度もくり返して
- ウ その種類の特徴をよく表して
- エ 論理に合っていてむだなく
- オ それだけでほかに比べるものなく

② 仲介役

- ア 二つのものの間に入って両方を取りつぐ働き
- イ あるものに新しい価値を加える働き
- ウ たくさんのものの中からよいものを選ぶ働き
- エ 関係のない二つのものに関係を持たせる働き
- オ 理解しづらいものを別の方法で説明する働き

③ 否応なしに

- ア 本当かうそかを確かめさせられることもなく
- イ より細かい部分まで正確にわかるように
- ウ 考えていることがあってもすべて否定されて
- エ 考える余裕を与えられることもないほど短時間に
- オ 自分で考えさせてもらえることもなく無理やりに

問二

A

C

に入る最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア かつばかつば

イ かつば、かつば

ウ かつば、らつば

エ かつば、かつばらつた

オ かつばかつば、らつた

カ かつば、らつば、かつた

問三

線1「詩のことは日常のことはと同じではありません」とあるが、二つのことのどちらのところが同じではないのか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日常のことは一般的なことが使われるため、だれにでも同じように意識されるのに対し、詩のことは普通は使われない特殊なものである、ことが伝える内容を予測できないところ。

イ 日常のことは伝えたい内容を表す手段に使われるため、読む人にあまり意識されていないのに対し、詩のことはことばによって内容を作り出すので、ことばの存在を意識せざるを得なくなるところ。

ウ 日常のことは伝えたい内容を客観的に表すのが目的であるため、その存在がだれにでも意識されるのに対し、詩のことは主観的であるので、ことばの存在があいまいになりやすくなるところ。

エ 日常のことは使うことばによって伝えたい内容が決定されるのに対し、詩のことは日常的に使われることばが用いられないので、読む人に特別な意識を働かせるようになるところ。

オ 日常のことは一般性が高く、だれが聞いても同じ内容に伝わるのに対し、詩のことは人によって受け止め方の違いが出るので、読む人がことばの多様性を自然に意識するようになるところ。

問四

線2「ことは新しい経験を生み出すということが起こっています」とあるが、「かつば」の詩を読んで生み出される「新しい経験」とはどのようなことか。詩の中の言葉を用いしないで、七十字以内で説明しなさい。

問五

3 に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 手段 イ 経験 ウ 創造 エ 内容 オ 日常

問六 線4「子どものことは、常にかきまわった範囲内だけにとどまっているのではなく、その枠を破って広がっていくという傾向を示すわけです」とあるが、子どものことは枠を破って広がっていくのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもは連続的な経験の驚きや喜びを詩的に表現することを好むから。

イ 子どもの自由な発想がありきたりの経験を新しいものにさせるから。

ウ 子どもはことばの能力では大人と同様の経験をして同じように表現できないから。

エ 子どもの未発達なことばの能力では日々の新しい経験を十分に語れないから。

オ 子どもの持つことばの中には経験を正確に語れる日常のことばがあまりないから。

三 次の各文の——線部の力タ力ナを漢字に直しなさい。

- ① 勉強にセンネンする。
- ② 景気のテイメイに歯止めをかける。
- ③ 農作物をシュツカする。
- ④ エイセイ的な工場で生産する。
- ⑤ シャワーをアびて汗を流す。
- ⑥ 機械のコシヨウを修理する。
- ⑦ 飛行機をソウジユウする。
- ⑧ 早めに宿題をスます。

[illegible]

L 2 2-1

